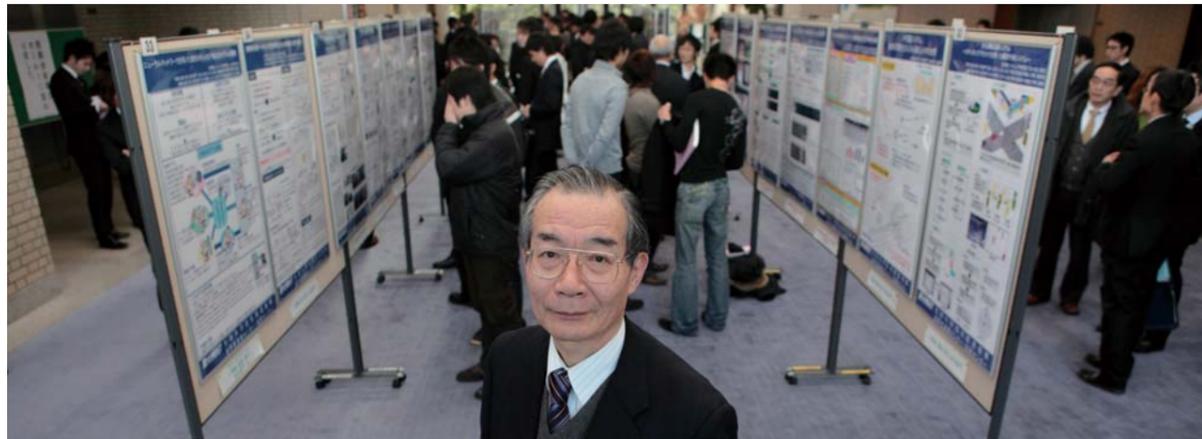


Organization for Research and Development of Innovative Science and Technology

新技術・新産業育成の拠点として 第13回「先端科学技術シンポジウム」を開催



内山 寛信 機構長に聞く

産学官界と関西大学の架け橋的組織である先端科学技術推進機構は、その前身で故松下幸之助氏の支援を受けた工業技術研究所の創設から今年で45年の歴史を誇る。現在は「新物質・機能素子・生産技術(N)」「情報・通信・電子(I)」「生命・人間・ロボティクス(B)」「環境・エネルギー・社会(E)」の4研究部門で構成されており、学内外者・機関との先端的共同研究、プロジェクト研究、産学共同研究、受託研究および産学官連携活動を積極的に推進。その幅広い研究活動の発表の場として、「第13回先端科学技術シンポジウム」が1月15・16日に千里山キャンパス100周年記念会館で開催された。

初日は塩崎賢明・神戸大学大学院工学研究科教授が「住まいの復興とコミュニティの再生」、2日目は福水健文・新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)理事が「これからのイノベーション」と題して特別講演。また、各会議室では4研究部門と研究プロジェクトによる研究発表が活発に行われた。当シンポジウム開催の目的や今後の展開について、内山寛信機構長に話を聞いた。

●社会的貢献の一助として

—先端科学技術推進機構(以下、先端機構)の特色は？
先端機構には理工系3学部を主とする約200名の教員が研究員として所属し、文部科学省など各省庁・NEDO等の事業に係るプロジェクト研究や民間企業との共同・受託研究など、多様な形態による研究活動を実施しています。従来、教育と研究の場であった大学は、今、第3の柱として社会貢献が求められて

います。そして、先端機構は研究活動と社会貢献の重要な窓口であると共に実質化を図る機能を担い、それらを大学院教育と連動させつつ推進しています。

4研究部門における研究グループは、最近の科学技術政策とその動向に即したキーワードをソートし、大学院・学部の学問・教育体系を横断して、現在の研究活動分野を中心に再集合した学際的な研究員組織で柔軟に構成されています。必然的に、プロジェクト・グループ研究は、多様な学際領域の先端的な研究課題を多専門分野の研究員によって、有機的・効率的に遂行できる環境となります。さらには、壁画などのカビ対策を含む文化財保存を事例にとれば、理工系と文科系の研究員・先生方による両視点に立つプロジェクト研究が必要となる場合もあります。このような、理工系・文科系が融合した研究領域にも、柔軟に対処できる体制にあります。

また、先端機構には大学院生や留学生、海外からの研究生も準研究員などとして参加しています。実践的なテーマに基づく研究を介して、理論と実際の融合と検証、応用能力・創造力の必要性和共同研究の在り方などを習得することが、若手研究者の育成に極めて有効なツールにもなっています。

●研究成果を社会に還元

—シンポジウム開催の目的について
社会や産業界の要請や課題に対し、理工系の研究員の持つ研究開発力・技術力・知的財産を活用して解決策を導き出し、その成果を発表する場が当シンポジウムです。関西大学先端機構が行っている研究のトピックスや、企業に提案できるテーマを取り上げています。研究員の研究内容を企業に紹介すると共に、技術相談会による企業からのニーズを研究員に伝えてマッチン

グを行い、新たな研究の展開に繋げることも狙いです。当シンポジウムによる年度の成果発表や年間を通してのセミナー開催、企業との技術相談会により、研究員の研究活動を学外諸機関のより多くの方々に紹介し、研究成果を社会に還元する役割を担っているのです。

—今回のシンポジウムの内容は？

昨年4月、先端機構内に地域再生センターが発足して以来、初のシンポジウムということもあり、1日目に「第1回地域再生センターシンポジウム」と開設を記念してのパネルディスカッションを実施するなど、1年間のトピックスを産業界にアピールする内容となりました。また、大学連携セッションでは関西大学と連携協定を結んでいる大阪大学と早稲田大学の先生による先端科学技術に関する講演を、産学官連携セッションでは経済産業省やNEDO等のプロジェクト研究に係る研究開発内容を紹介しました。2日目は文部科学省等の大型プロジェクト研究や学内での重点グループ研究・研究会などを含め、両日共に学術的な世界に力点を置いた浪漫溢れる内容です。

●多分野にわたる研究を融合

—今後の展望は？

今後、先端機構下で実施されるプロジェクト研究については、科学技術分野での評価に留まらず、社会的・経済的な効果を加えた総合的評価の必要性が増すため、理工系の専門分野の研究員だけでなく、文科系の先生方の支援と参加が見込まれる大型プロジェクトを組織するための環境作りが急務と言えます。文部科学省等の大型研究では研究特区を作り、全国の大学・研究機関・企業から多くの研究者を集めてプロジェクトを組む試み



も開始されています。関西大学東京センターに拠点を設け、参画企業等と連携しながら研究開発を行う関西大学発のプロジェクトが発足し始動していますが、これは学内的な先行事例とも言えます。

他方、大学院教育と連動し、教育の集大成である研究活動の実践の場を提供する一翼を担う点からは、大学院とさらに密な連携を強め、研究の推進と共に教育を支援・補完する機能を持つ必要もあります。例えば、共同研究先でのインターンシップや双方向的なサンドイッチ方式の研究活動の実現、支援組織である関西大学科学技術振興会との共同研究体制の確立などが、その範疇として考えられます。

また、先端機構下における研究活動が質量ともに増え、本シンポジウムの講演・発表は極めてタイトなスケジュール下で実施されています。その解決策として、本年度から既に千里山キャンパスで部門別発表会を行っておりますが、来年度からは東京センターでも講演会の開催を企画しています。企業関係者にもご案内し、各種のご相談にはコーディネーターが応じる予定です。

■社会貢献・連携事業／地域連携

「第28回『地方の時代』映像祭2008」を開催

関西大学と日本放送協会、日本民間放送連盟の3者で共同主催する「第28回『地方の時代』映像祭2008」が、昨年11月1日から4日までの4日間、千里山キャンパスで開催された。2日には贈賞式が行われ、優秀賞9作品と奨励賞3作品が選ばれた。グランプリは毎日放送制作の「映像'07『夫はなぜ、死んだのか〜過労死認定の厚い壁〜』」で、実行委員の河田第一学長からトロフィーと表彰状が贈呈された。期間中は参加作品の上映、ワークショップなども開催された。

社会学部の学生が大型絵馬をお披露目

昨年12月11日、天神橋1・2・3丁目商店街に社会学部の大西正曹教授のゼミ生が制作した横2.2m×縦1.5mの大型絵馬3点がお目見えした。1ヵ月がかりで制作された絵馬には、

商店街のさらなる発展を祈念して「大阪天満宮」と干支の「丑」が描かれている。大西教授のゼミ生は平成19年11月に本学と天神橋筋商店街連合会が締結した地域連携協定の一環として、他の社会学部のゼミ生とともに商店街を案内する「町街人」となり活躍している。

「第2回関大ふくい笑い講」「第3回関大笑い講」を開催

昨年12月20日に、本学と福井県が主催する「第2回関大ふくい笑い講」を福井県生活学習館で開催した。落語を鑑賞しながらの『笑い測定機』の実験や「笑い」についての講演が行われ、会場は終始笑いに包まれた。続いて1月9日には吉本興業株式会社協賛のもと「第3回関大笑い講」を千里山キャンパスで開催。こちらも『笑い測定機』の実験や狂言、ホスピタルクラウンの実演などが行われ、「笑い」ながら「笑い」を科学する機会となった。